

## ダブル・シンク（二重思考）

——一九四九年の符合——

田崎 弘章

永井隆『長崎の鐘』に「原子爆弾の力」という章がある。原子爆弾の原理とその威力を科学的に解説する永井の筆は、妙な熱を帯びている。

この章を読む度に、私は何とも言えない気分になる。被爆者でありながら自然科学の徒でもあったが故に、永井は奇妙な形で引き裂かれていることが分かるからだ。そして、その引き裂かれた傷は、今、まぎれもなく私自身の中にも見いだせるものとなっているからである。「原子爆弾の力」から引く。

あつ、原子爆弾！

私の心はもう一度、昨日と同じ衝撃を受けた。原子爆弾の完成！日本は敗れた！

なるほどそうだ。この威力は原子爆弾でなければならぬ。

昨日からの観察の結果は、予想されていた原子爆弾の現象と一々符節を合わすものだ。ついにこの困難な研究を完成したのであったか。科学の勝利、祖国の敗北。物理学者の歡喜、日本人の悲嘆。私は複雑な思いに胸をかき乱されつつ、酸鼻を極むる原子野を徘徊した。（傍線は田崎による。）

ここに言う「複雑な思い」とは何であろうか。下手の漢詩でもあるまいに「完成！—敗れた！」「勝利—敗北」「歡喜—悲嘆」という対句のレトリックまで駆使して、永井が述べようとしている「思い」、それは意外に根深いものに見える。

この対句に着目することで、「勝利」し「歡喜」している主体が、戦勝国「アメリカ」ではなく、「科学」「物理学者」とされていることに、見えざる「検閲」の手の気配を感じる論者もいることだろう。しかし、やはり、ここでの永井の言葉は、そのままに読まれるべきであろう。一身で「勝利—敗北」「歡喜—悲嘆」という、相反する両極端の感情を味わっているからこそ、「胸をかき乱され」ているのだと。そう読むことによつて、永井の「複雑な思い」は、今では牧歌的とすら感じられるナショナルなものを超え、現代人の感情と地続きとなる。

永井が抱いた感情は、現代を生きる我々が、高度な科学技術がもたらす利便性と、その背後に潜む原発事故の危険性とを、同時に受け容れながら生活していかざるを得ない状況と、よく似ている。永井の「複雑な思い」は、決してレトリカルな言葉のあやなどではない。

この文章を書いているこの瞬間、私が使用しているパーソナル・コンピュータはノイマン型である。長崎に投下されたプルトニウム型原爆の爆縮装置製造のために開発された計算機をプロトタイプとする。発明者はプルトニウム型原爆の発明者と同じ、フォン・ノイマン。また、この原稿が完成したら、インターネットを利用して電

子メールの添付ファイルで事務局に送付することになるであろう。この技術は、アメリカ国防総省が開発した通信網構想アーパネットをその起源とする。そして、何より忘れてならないことは、この執筆・送信といった作業を可能にしているのが、佐世保にほど近い玄海原子力発電所で作り出された電力だということである。

私自身の中にも、漠然とはあるが、核兵器のない平和な世界を希求する気持ちはある。しかし、この気持ちを、このデイスプレーイ上で表現したならば、その瞬間、私は、核弾頭を搭載したミサイルのボディに、「人類に平和を！」とペイントしたような後味の悪さを覚えるだろうと予感する。もちろん、その起源がどうであろうと技術は技術であって、使い方が重要であるという考え方が正論であることくらい分かっている。だが、福島第一原子力発電所の事故以降も、この正論は成り立つのだろうか。

原子力発電所から送電された電力を使用しながら、ノイマンが発明したコンピュータを作動させて執筆し、アメリカ国防総省が開発したインターネットを利用してメールを送る。

今までは何の疑問もなく遂行してきた日常的作業だが、「三・一一」以後、私は、永井隆と同様に「複雑な思い」に引き裂かれていることを感じる…。

そろそろこの駄文を締めくくろう。読者諸賢はお気づきのおおりに、本文のタイトル「ダブル・シンク（二重思考）」は、ジョージ・オーウェルの名作『一九八四年』からの引用である。

一九四九年、一月に『長崎の鐘』刊行、六月に『一九八四年』刊行。永井とオーウェルの二人は、同時期に、病に苦しみながら、

それぞれの作品を執筆し、同じ年に刊行したのだ。私はこの符合に蹟いた。

「ダブル・シンク（二重思考）」とは、一人の人間が矛盾した二つの信念を同時に持ち、同時に受け容れることができるという、『一九八四年』中の架空国家の国民に要求される思考能力のことである。受容したい現実認識を自己規制により操作し、受け容れることを可能にする思考方法でもある。もちろん、オーウェルは、非人間的な、異常な思考方法として描いている。

『一九八四年』は、書かれた時代背景から、スターリニズム批判という文脈で読まれてきた。しかし、ある時、私はこの作品が、広義の「原爆文学」としても読めることに思い至り、いつか詳しく論じてみたいと思うようになっていた。この作品は、一九五〇年代に勃発したとされる核戦争後の世界を描いているからだ。また、冷戦が終わり、インターネットが普及した社会になって初めて、オーウェルがこの作品に込めた底知れぬ真意が見えてきたということもある。

永井隆『長崎の鐘』『原子爆弾の力』の章に書き込まれた「複雑な思い」と、オーウェルが『一九八四年』に描いた「ダブル・シンク（二重思考）」とは、深いところで通底している。しかし、単純に一九四九年という作品の発表年だけを補助線として両者を共時的につないだのでは、あまりにお粗末であろう。実は、もう一本、重要な補助線がある。しかし、ここで紙幅は尽きた。いづれ機会を見てまとめてみたい。